

坂本龍一＋YCAM InterLab

「Forest Symphony」

森が奏でる交響曲

— 樹木が発する微弱な生体電位をもとに生成したサウンドを用いた
インスタレーション

坂本龍一氏は東日本大震災以降、〈人類が生きる環境〉を支える森林へと意識を向けるべく、樹木が発する微弱な生体電位を元に楽曲を制作するというプロジェクトを構想していました。YCAM InterLab では、この構想のために、樹木が発する生体電位だけでなく、樹木の周りの環境の変化が樹木の生体電位に与える影響までも考慮するための温度や湿度、照度、気圧を計測するためのデバイスを開発。世界各地のアートセンターや研究機関にデータ収集を呼びかけました。

2013 年に山口情報芸術センター[YCAM]で発表した際には、会期中、世界各地の樹木



の生体電位、並びに周囲の環境データが日々インターネットを利用し展覧会場へと送信され、それらのデータは坂本のディレクションによって構築されたアルゴリズムを通して音楽へと変換され、会場で奏でられました。そして、センサーデバイスが設置された環境の情報をビジュアライズした映像が、会場を包み込むサウンドスケープと統合され、季節や天候に応じて変化

を続ける〈森のような空間〉が出現しました。

今回は、雪舟庭を会場にして 2013 年に集められたデータを元に本作を再展示します。

坂本龍一＋高谷史郎

「water state 1」

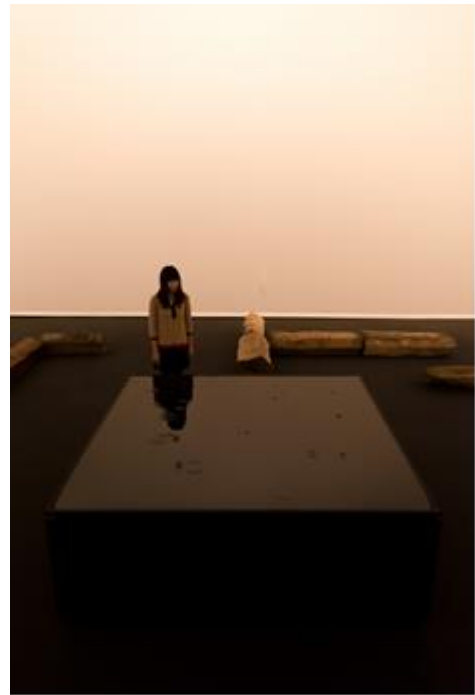
水が見せる多様な様態を抽出する

— 水が見せるさまざまな表情を、水そのものを素材として用いた
インスタレーション作品

会場の中央には、一見鏡と見間違ふほど澄んだ水面を持つ台座と、巨大な岩が周囲に配置されている。水面には、会場を包み込む繊細なサウンドに呼応するかのよう水滴が落ち、

波紋が広がる。時間をかけ水滴の落ちる量やスピード、場所が変化していく。会場内の光量が時間とともに微かに変化していくなか、鑑賞者は水滴によって波紋が広がり干渉しあう様子を眺める。水の様態の変化を起点とした、環境のわずかなコントラストの変化により、さまざまな記憶を喚起させることで、環境への意識を開かれていく。

水滴を自在に落下させることができる装置は YCAM インターラボが開発したもので、地球上の気象データを取り込んで、それをもとに水滴の落下や、サウンド、照明の変化へと反映させています。



■坂本龍一

音楽家。1952 年生まれ、米国ニューヨーク在住。78 年『千のナイフ』でデビュー、同年 YMO に参加。YMO 散開後、数々の映画音楽を手がけ、作曲家として米アカデミー賞を受賞するなど世界的な評価を得つつ、常に革新的なサウンドを追求している。2007 年には「more trees」を設立し、温暖化防止についての啓蒙や植樹活動を行う。11 年東日本大震災復興支援プロジェクトとして「LIFE311 by more trees」「www.kizunaworld.org」「こどもの音楽再生基金」など、さまざまな活動を続けている。

■高谷史郎

アーティスト。1963 年生まれ。84 年、アーティストグループ「ダムタイプ」の創設時から活動に参加。ビジュアルワークを総合的に担当し、現在はディレクションに関わる。主な個人の活動としては、99 年、坂本龍一のオペラ『LIFE』の映像担当。07 年、坂本龍一とのコラボレーションによるインスタレーション『LIFE - fluid, invisible, inaudible...』（山口情報芸術センター）を制作。同年、気候変動について考えるための北極圏遠征プロジェクト「Cape Farewell」（イギリス）に参加。

■YCAM InterLab

山口情報芸術センター[YCAM]に附属するメディアアートを専門とした研究開発チーム。主に YCAM の委嘱作品として発表するインスタレーション作品やパフォーマンスアーツ作品の技術開発を行っている。また、文化施設における技術者間の交流と人的ネットワークの構築、研究領域の拡大・普及を目的とし、国内外から研究者を招聘する共同研究などにも積極的に取り組んでいる。